

## 友愛主義社会綱要（グリユンドリセ）——その二

小林 彌六

企業は生産と供給を司どる大切な経済単位である。設備・資産もあり従業員もいる。市場経済システムをベースにすることで、製品の売上高や生産手段と労働等の費用を貨幣を計算単位に算定できるといふ利点もある。ただし企業活動の目標を切り換えることである。目標を自らの物的利得追求に置くのではなく消費者や他の企業や社会に対する奉仕に置く。さらに進んでいえば心を込めて良い品物を安く提供し顧客から喜ばれることを目標にする。このような企業倫理の重視で顧客に喜ばれその企業の信用も増す。売れ行きも増える。エゴイステイックな物的利益のみに走るよりはこうした方が企業経営は結果的には成功する。(capitalism より moral economy へ)

消費者や他企業等には喜ばれるし企業も成功する。人々の心は和み楽しい。友愛の生産、愛のG.N.P.が産まれる。市場は隣人から奪って自分だけが少しでも多く儲けようとする場、つまり貧欲・物欲・欲のかきあいの場所ではなくなる。顔で笑って心ではチエツと舌うちする場所ではなくなる。どれだけ多く他人の財布から抜き取るか、いかにケチをするかの自他のかけ引き・欺し合い・争いの場所でなくなる。これまでの市場（交換）のように良心・友愛の心を殺すあさましい争いの場所でなくなる。企業はしばしば粗悪あるいは有害な品物でも売りさえすればよいという姿

勢で作り売る、かつできるだけ高く売ろうとする。良い品物はできるだけ高く売ろうとする。消費者はできるだけ良い品物をできるだけ安く買おうとする。

品物の品質についても価格についても供給サイドと需要サイドは損得関係が逆で違い違っている。そのため両者の心はスレ違い相互不信が根づいて心の中にマイナスのG.N.P.が生み出される。いわゆる需要曲線、供給曲線や需給均衡も説かれるようなきれいなことではなく黒く汚れたものといえる。これまでの市場経済・資本主義経済制度はいわば物質的次元の我利・利己主義の制度である。自己欲望追求・エゴイズム中心の精神的次元からすると大変に低級な経済システムである。人間は精神的向上を目指し利他・互酬・博愛を追求しなければならぬ生き物であるのに、近代において誤ってエゴイズムと物欲追求を軸にする経済制度を作り中に転がり込んだのだ。そしてその迷妄からなかなか抜け出すことができない。物質だけがすべてであると思う唯物主義と物欲（いわば「肉の欲」）に絡めとられて低級な世界をさ迷っているともいえよう。「神の国」の存在を忘れ自己の本質（ガイスト）を知らず、徒らに地上の煩惱の肉欲（五官の欲・物欲）の我執に絡めとられて偽りの生を生きている。大多数の人々が自らの心を偽り汚し相互に傷つけて生きて生きる。人格的にも黒く汚れ低下し、インフレになり財テク・裏取引・騙しが横行し（政経の各種スキャンダル）、貿易黒字による高成長実行に象徴される通り国際的にも他から削り自分だけ肥ろうとする。そのために国際的に摩擦も起きる。真実在を忘れエゴイズムと拝金主義・拝物主義への誤った信仰から抜け出ることができない。

経済活動の目標を自分だけが可愛く物が神様だという我欲・エゴイズムというモノ追求（A・スマスという自我愛 self love、新古典派のホモ・エコノミックス）の妄念・悪徳から他者への奉仕・「相互奉仕」（mutual help）の美徳に切り換える。経済活動の目標を精神性が高い「稀少財をつうじる愛の循環」人格性の向上に切り換える。これは特に

変わったことをいうのではない。文化人類学（マリノウスキー）や経済人類学（ポラニー、ゴドリエら）が明らかにしたように交換を含む大半の経済活動は本来が互酬性や「無償の贈与」に支えられていたのである。交換や経済行為から友愛と互酬を切り捨てエゴイスティックで物欲指向の行為に変えたのは、古代や中世の一部の人々（商人など）の貧欲と物欲と近世・現代でのその一般的な誤用なのである。すでに述べたようにそれが多くの弊害を生み、筆者がいう収獲増法則（資本蓄積・技術進歩・労働人口増加による）と資源減法則（資源濫費・環境破壊等）を生み人類の「存続」を脅かすところまでできている。

経済活動の軸心にかつて、中軸にあつた精神性や倫理性を復活させる。相互奉仕や互助・互酬の精神性を復活させる。物的な損得一本槍ではなく人間らしい精神性を加えて行く。経済活動の目標の一つに、交換価値の獲得（いわゆる利潤極大 profit maximization）だけではなく人間にふさわしい徳行・人類愛・人格向上を加えていく。むしろそれを柱にして行く。市場交換のシステム（市場経済）はそのように利用できるから、それによって人々の交換をつうじる社会的分業と相互奉仕が可能になる。交換（exchange）は物欲・快楽充足の極大化（例えば新古典派の基本命題である「効用極大化」というよりは互酬・相互奉仕という精神的な要素と結びつくものになる。「交換の誤用」が正される。「貨幣の誤用」も正される貨幣は交換価値の象徴（物に対する支配力）という側面だけでなく同時に人々のコミュニケーションをとりもつシンボル・象徴になる。良く知られるようにレヴィストロースは経済は「財のコミュニケーション」（言葉のコミュニケーション）や「女性のコミュニケーション」に並ぶ）であると述べている。

(註) M・ダグラス、浅田彰・佐和隆光訳「儀礼としての経済」新曜社

友愛主義社会綱要（グリユドリセ）―その二

交換、生産と消費（分配）の活動を上記のように精神性の行為に変革することによって生産物の品質も良くなり安価になりインフレが抑えられ、生産性アップも可能になる。「利他。利自」であって人々は真に価値ある富である友愛・同朋愛に目覚めて暖かい気持ちで人生を送ることができる。したがって精神的にも向上可能であって、魂の面で悪い成績の人生で終わらずにすむ。経済活動の目標にモノの生産・分配・消費だけでなく愛の生産と享受を加えるべきである。人間の内奥にある真の実在ともいうべき心・精神・靈魂の修養と向上が、人間にとってじつは人生の最大の目標であることを認識し自覚すべきであろう。人生の真の幸福（価値）は人生において味わう物的効用や満足総量の極大化（仮の快樂）にあるのではない。身体的な快樂（Pleasure）の極大化といって見ればビールを何千ダース飲んだとか、宝石や勲章をいくつ手に入れたとかにあるわけではないのである。

企業も個人と同じでその資産や富を用い社会に対し文化・厚生等に尽すべきであって、徒らに動物的な利益追求に走るべきではない。経済人類学が教えるように経済は本来がモノ（物）オンリーの活動ではない。何万年もの永い間本来精神的・文化的要素と一体化して営まれてきた精神性を帯びた活動なのである。経済活動を「仮象」というべき乾いた札勘定と計数計算オンリーから救い出し、その中核に本質たる倫理性・精神性・文化性を据えるべきである。

市場経済・商品経済・企業活動は私利・モノ・金銭追求のシステムだとは限られない。極端な私利・物利追求は近代の世界がはまり込んだ奇妙な倒錯にしか過ぎない。資本主義システムでは交換経済・商品経済（市場経済）や企業が誤って悪魔的な目的のために使用されているのである。私共は今闇の心の極端な我欲・エゴ・物欲追求による動物的な欲望無際限追求の岩蔭穴倉からなんとかして這い出さねばならない。新古典派経済学（サミュエルソンやヒツ

クスらを現代の代表とする）は企業の利潤極大化や消費者の効用極大化や各種生産要素の効率的配分・効率極大化の追求、賃金・利潤・利子の分配その他の多くの事項を、ファクション・ショーのように各経済主体にとって合理的なものとしてエレガントに説明しようとする<sup>(註)</sup>。合理的選択と均衡によると説明する。だが上述のようにこのシステムが悪徳に充ちた極めて不合理なシステムであることが理解され自覚されないと非常に危険な面がある。このことが強く銘記されねばならぬだろう。（―むろんマクロ経済理論を中心にそのメリットも沢山あることは率直に認められるべきなのだ。）

(註) 宇沢弘文『近代経済学の再検討』『経済学の考え方』各岩波書店、その他の著作には近代経済学の内面からの自己批判が真剣に行われており、読む人の胸をうつ。

今、企業経営理念の根元的転換が強くとめられている。例えばコカインを作り売ったり性（セックス）を商品化し産業化してはいけない。投機や賭け事の産業化もあまり好ましくない。非道徳を商品化してはいけない。人間の動物的欲望をそそり利用する低級な類のものを商品として作り売ってはならない。暴力や犯罪を誘い正当化するようなものを商品化し仕事の種にしてはいけない。それらの行為は人倫上の犯罪といえよう。非倫理を商品化し所得の種にすることは忌避さるべきことだろう。倫理経済（モラル・エコノミー）に転換すべきである。

儲かるからといって勤労者を酷使し各種決定から排除し、「要素代替」(substitution)という言葉で機械と効率競争を強い、人間を物扱いする、つまり勤労者を家畜扱いする。これらは人道にもとる行為といふべきだろう。人間の労働を機械・道具・原料と同じ資源とみなし、低賃金を労働市場の需要と供給の均衡によると正当化するのも疑問が大

きい理論化といわねばならぬだろう。儲けるために第三世界を従属させたり利用して国土を荒廃させたり、資源を乱獲・濫費し廃棄物の山を築き、美しい自然を心なく破壊し公害タレ流しをし生態系を破壊したりすることはゆるされない。各種生物・植物を傷つけ母なる地球を加速度的に破壊してはならない。物欲追求のために兵器の開発や生産に熱中し、安全保障や国際的貢献という名目で軍隊を動かし増強し戦争を惹き起こす策謀をめぐらしてはならない。戦争を産業化し、あるいは投機にかまけるといふ類の悪魔につかれた悪徳の所業をおこなってはならない。

儲けるためには何をしてもよいといわんばかりの、倫理感喪失状態から抜け出す努力をせねばならぬ。現代の「企業の誤用」を正さねばならぬ。企業・経営のファンダがあり機械や技術・土地がある。だがそれらを用い動かしているのは経営者であり従業員であり、所詮は一人一人の人間である。我々一人一人が自らの生の価値についてどう思うか、自らの人生にとって一番大切なのは何なのか、価値観の問いつめを行うことを現在を避けて通れない。それが社会や世界を改革する事業に通じる。幸い今、このような反省の気運が実業界・学界・言論界にも序々に始まっている。日本については実業観の転換をもとめる気運が広がりがつある。企業と社会との関係を問い直すとする気運や企業市民という概念の提起などの最近の動きはこれにつうじる<sup>(註)</sup>。これまで誤った目的に向けられてきた企業という単位を正しい方法で利用するようにすることが大切である。働く側でも若い世代を中心に、これまでの高成長を担い退役または退役が近い「会社人間」とは一味違い仕事と生活を区別して考える傾向が出てきている。

(註) 例えば小山克明『「悟り」の経営』竹井出版、松下幸之助『松下政経塾塾長講話録』PHP研究所、J・オートリー『愛と利益の奇跡』経済界、『今、多くの企業が新しい経営理念の中心に据えようとしている概念に「ステイクホルダー」(企業の利害関係者)との「共生』

という考え方がある。株主、取引先、消費者など企業を取り巻く相手の立場を尊重した関係を築こうという狙いである。」(日本経済新聞、一九九一年九月二三日社説)

この企業理念の転換は労使関係の転換にもつうじる。勤労者(サラリーマン、ブルーカラー等)は在来、経営者(層)や大株主よりはずっと低い立場に置かれている。企業内の人事権や財務権や運営権は経営者が専一的に握っている。企業経営について勤労者はアウトサイダーであり、経営者は君主である。ソ連や東欧諸国で批判的になった経済・企業内での官僚制は今なお西側諸国の企業内にどっかりと腰を据えている。

労働契約は法的には対等かつ平等な者同士の契約と看做されている。だが実質的には富と権限(権力)をもつ者と片や持たない者との間の契約である。当該労働契約が成り立たずとも経営者は暮らしに困らない。ところが勤労者は暮らしに困る。勤労者は立場が弱く選択の範囲が狭い。賃金やその他の労働条件もいきおい悪化する。勤労者は少々条件(賃金・労働時間・休暇数・仕事の内容・雰囲気・労働環境その他福利厚生)が良くないなと思っても、ある程度のところ妥協して契約を結ぶ。あまり労働条件がはつきりしないままでも勤めることも我が国などでは沢山ある。働くか働かないかは勤労者の「余暇」と「収入」の選択の問題だと、新古典派経済学流にのんびりと構えていられないのが真実である。賃金決定についても労働市場での需要と供給の均衡によってのみ決定されるのだとあっさり割り切れない事情もある。古典派経済学やマルクス経済学が生活資料の価額による賃金規定を説くにはそれなりの理由がある。経営者はできるだけ賃金を低く抑えたいと望むし、勤労者は生活費だけはどうしても確保しなければならぬ、できるだけ多いほうが良いと願うのである。

労働契約はこれまで大部分の経済学が考えたような対等な立場での商品売買契約関係ではなく、上下の人間関係が

絡みついてゐることを見落とせない。さらに作業・労働に服務してゐる間に指令に従ひ労働することにもとづく自己実現欲求の抑圧、いわゆる労働疎外がある。また経営者に対する勤労者の人格的な服従関係があることに経済学はもつと注目する必要がある。

経営者・資本家（とくに大企業）は巨大な経済力がありそれが経済権力や政治権力となつて、いわば裸で無力の持たざる労働者・勤労者（中小企業も似た立場）を威圧する。経営者（資本家）サイドから見ると労働者は協力者ではなく、人間としてよりはむしろ道具や機械と同じように見える。したがつて労働者を使うより機械の方がコスト安になると見ればレイ・オフする。経営者は奉仕・利他。即利自の精神を忘れて他者を粗末に扱ひ私利・物欲の追求に走る。心の中は灰色ないし黒色で生きてゐる。労働者も経営者（資本家）や上役を敬愛しないし、自ら進んで勤労にいそむるでもない。生活の資を得るためにやむなく労働し、内心では経営者や資本家を軽蔑したり憎んだり、嫉妬してゐる。経営者と勤労者は互酬・互助・友愛によつて結ばれておらず、両者の心理状態や想念は決して良いとはいえない。これでは企業も経営者も勤労者と真実在につうじる心・魂と精神面で低下し互いに汚し傷つけ墮落するばかりである。経営者（資本家）が金銭（物質）を神として追いもとめ、勤労者は生物的に生きるための金や財貨を追いもとめる暮らしに明け暮れるためにまことにみじめな情景が地上で日々繰り広げられてゐる。人々自らの実相が魂であり、生きる目的としてもつとも大切なのは心の向上・魂の浄化であることを悟らぬために、精神的汚濁と汚染と社会の実相上のはなはだしい汚濁が広く濃く拡がっている。これは筆者がいうマイナスのGNPとマイナスのストック形成の一つの大きな要因である。

すでに述べたように企業内（さらには官庁・政党・病院・学校等々の各種の組織内）で、経営方針の決定・予算配



分・人事ならびに人事考課等の意志決定において資本家（経営者）や管理者による専制や集権・官僚主義が広くはびこっている。これに対し従業員、一般の機関構成員は無権利に近い状態におし込められて管理され支配によつて拘束されている。労働・勤労の場での神性につうじる自己実現の条件を奪われ半ば動物的な生き方を強いられている。一方で経営者（資本家）は実質的には動物的な私益や権力追求に走っているケースが大半である。ところが自らその実相を自覚していない場合が多いといつてよからう。いずれにせよこれは世界が注視しているソ連・東欧諸国・中国等の国有企業内での集権制と似たところがある。労働に対し賃金報酬が支払われはするにせよ、企業組織内での集権的管理・支配と服従といういわば政治的關係・非同権性があることは、しかと注視されるべきであろう。今後は労使關係でも勤労者の地位向上・権限拡大が大切であり、さらに互助・相互奉仕・協同・相互愛にもとづく経営への転換が必要だろう。その方が友愛のGNPが増え、企業内の人間關係も良くなり事業の実績も不思議に好転する。その実例は沢山ある。

ついでながら一言加えよう。古典的資本主義の時代には労働者は人間扱いされなかった。労働者は惨めな境遇のなかで人間並みに扱われず日々最低限の物欲充足のために追われゆとりがなかった。そのために人間にとつて大切極まらない倫理的・人格的向上つまり精神的向上は殆んど望めない状態だった。この事実を眼前にして偉大なる人々R・オーウェン、J・S・ミル、ラスキン、我が国でも内村鑑三・賀川豊彦・鈴木文治らは大変に心を痛め、勤労者・庶民の物的・精神的向上のために工夫をこらし非常な尽力をしたのである<sup>(註)</sup>。

(註) ジョルジュ・ルフラン・花崎皐平訳『現代ヨーロッパ思想史』(上)・(下)など参照

その後現代資本主義においては生産性向上や社会主義運動（社会民主主義）の圧力もあつて勤労者の賃金も引き上げられ各種の労働条件・生活状況も改善された。いわばかなり人間らしく生活できるようになった。とはいつても企業や労使関係の根元的改革がなされたわけではなく、財政負担増や企業と勤労者双方の意欲低下を招いた。新保守主義の反動を生じたのもこれによる。いずれにせよ人々は物質的欲望追求（J・ペンサム流の効用・快樂極大化）に流されて生き、みじめな人生を終わることが多い。

僅かに家族愛やある限られた範囲での友愛を実践できるに過ぎず、したがって友愛宇宙の原理に沿う友愛者の境地に達しられる人は少ない。企業も友愛企業にまで向上しえているものは少ない。つまり企業も人間も非精神的・非文化的で人間にもとめられている精神性の水準以下をさまよっている。つまり財貨やサービスも作るがいわば悪徳や罪悪もおびただしく産出しているといえよう。企業は今後は奉仕を原理にする高い精神性と倫理性を備えた機関に転化・向上を図らねばならず、友愛企業へのこの精神的向上が多く、友愛市民を生み出すことになるだろう。

いこのような経済システム改革（「愛と寡の経済」アグラ）の理想に目覚め各人が向上に努めるならば生産者と消費者の関係も欲のかきあい、ダマシあい、他者からの削り取り合戦のゼロサム・ゲームではなく「利他即利自」の相互奉仕・互助の友愛関係に向上できる。悪徳と悪徳が支配するドロ沼のような汚濁の環境から脱け出て愛と善と光明の世界に脱け出せる。光り輝く実相の世界の目から見ると現代世界の人々の顛落と悪念・悪徳による腐敗はまさに末期的な様相を呈しており嘆かわしい限りである。この自覚が私共人類に強くもとめられている。環境破壊はなほだしいが精神面での社会汚染と環境破壊はまさに目を蔽わんばかりである。

いずれにせよ友愛原理による企業経営に転換することで、(イ)顧客をつかめ、人々は気持よく働き生活するようになり、企業の業績も伸びる。労使関係も円滑になり勤労者の福利も増進する。ミクロの繁栄だけでなくマクロの繁栄も見られる。(ロ)付加価値(所得)が増え、労使ともに栄える。(ハ)諸方面の人々の意欲が増進する。(ニ)資本主義経済につきまとうマクロの供給(生産)と需要(消費)の不均衡ないしは貯蓄(S)と投資(I)のインバランス(不均衡)が緩和できる。(ホ)国際的不均衡の緩和ができる。(ヘ)インフレーション的経済体質の是正や虚業経済(財テク)化が防  
止できる。

資本主義経済での道義なき金銭・モノ・権力・名誉・評判追求の自己目的化、尊大にも地球を人間の各種の物欲の無限充足のための資源と考える心理様式・思考パターンは、巨大な資源の浪費、生活環境の破壊・生態系の破壊を生む。資本主義経済システム(エゴイステイックな物欲無限追求がその核心)での悪徳(煩惱)の暴走は母なる地球と子なる人類の「共存共栄」を困難にする。人類はかの悪徳の街ソドムとゴムラの街の住人の如く滅亡に近づきつつある。筆者がいう収穫増進法則(Law of increasing returns)と連動する資源減減法則<sup>(註)</sup>(Law of decreasing resources)の作用が人類の「存続」を困難にする。

(註) この場合資源には大気・水・森林・生態系等を含めている。古典派経済学や新古典派経済学は収穫減減を重視しているが長期的に問題になるのは資源減減だといえよう。マルクスは意外にこの資源減減を軽視している。生産の主たる要素は労働なのだという思い入れが非常に強く、生産力の発展がキー・コンセプトになって資源・自然の限りなく大きな意味の評価が抜け落ちた傾向がある。

ついでに記せばマルクスはいささか安易に唯物論を採ったきらいがある。そのために人間存在の実体が何であるかを見誤った形跡がある。そのためにマルクス経済学では人間や経済行為・現代経済・資本主義経済・現代社会において人間の心・魂がどのようなかたち

で位置づけられているか、またその位置づけが企業・勤労者・家計・消費者・政府・国際関係にどのような作用を及ぼしているか等の論点について立ち入った認識が難しくなっている面がある。この点はいわゆる近代経済学でも事情はあまり変わらない。人間はごく表面的な次元でしか捉えられていないし、一般に人間本性 (human nature) と経済との関係も本当に深く問いつめられているところまで行っていない。したがってまた現代の経済制度の意味も本当には明らかにされていない。ここからも経済理論のさらに一層進んだ展開が必要なのがわかる。

私人類は太陽の光りの偉大なる照射・恵みの下で母なる地球に感謝し、これを大切にする生き方を真剣に考えねばならない。「愛と善と共生の経済」への根元的な転換を考えねばならない。

$G-W \dots P \dots W' - G$  の企業システムを  $V$  …

$W \dots \left[ \begin{matrix} P \\ V \end{matrix} \right] \dots W' - \left\{ \begin{matrix} G \\ V \end{matrix} \right\} \left\{ \begin{matrix} G \\ V \end{matrix} \right\} - W \dots \left[ \begin{matrix} P \\ V \end{matrix} \right] \dots$

の企業システムに改良することである。Vは美徳・友愛、Wは商品、Gは貨幣

在来の経済学との関係をいえばマルクス経済学は生産力発展史観で資源や生態系・エコロジーの問題を軽視している。これには人間本性論ひいては地球(自然)・宇宙本性論を軽視したのと同じ事情がある。近代経済学は資源をたんなるモノの問題として(人間も労働力資源として)ひたすら没倫理的に物的な効率性(快楽)を追求することが多かった<sup>(註1)</sup>。また古典学派では土地を重視し収穫逓減法則を重視したが環境問題や生態系の保護問題には殆んど切り込んでいない。これからは経済学においても、さらには実業活動、ひいては経営学等でも資源効率配分オンリーの経済成長至上主義という没倫理的な発想から脱け出す必要がある。友愛経済学・友愛経済・友愛世界の観点が必要なのであ

る。物的なもの・快樂等から眼を転じて人間の本性に内在する崇高なる美を注視する価値観に転じねばならない。世界観・人間観の根元的反省と社会科学の再出発がこの人類存亡の危機の時代にひたすらもとめられている。地上にも欲望と煩惱と損得と奪い合いだけではない真に良きものがあるのである。「神の国」が真にあるだけではない。「神の国」の地上世界（三次元）での実現の努力が必要なのである。マルクスの過失は「神の国」の存在を否定し、人間の内実における「神性」の何たるかを理解しなかつた点にある。にもかかわらず多分に物的な側面に傾いてはいたけれど（生産力主義）、「神の国」のイメージに近いものを実現しようと欲したのである。実際は「神の国」を地上に実現しようとする良き熱烈な指向性をもって歩んだにもかかわらず、かたくなな心性で地上世界（三次元）以外の世界の存在や「神の国」の存在を否定しようとしたために、自己矛盾をきたしてしまつたのである<sup>(註)</sup>。

(註一) この点については例えば、宇沢弘文『近代経済学の再検討』その他、ガルブレイス『経済学とその公共目的』その他の著作でのガルブレイスの新古典派批判を参照。

(註二) 青年期のマルクスは人間そのものに注目していろいろ考究を重ねた。そして人間本性を「類的存在」としての人間という点にもとめようとした。それに関連づけて「人間の自己疎外」とか、「自己疎外の止揚」を熱心に論じている。彼の念頭には、熱烈な人間解放の希いがあつていわゆる共産主義（プランキなどの流れをくむ）はその見取図を示すものと受け取られていたようである。「自然の人間の本質は、社会的人間にとつてはじめて現存する」とも記している。

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の間の本質の現実的な獲得としての共産主義、この共産主義は完成した自然主義としてⅡ人間主義であり、完成した人間主義としてⅡ自然主義である」（城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』一三〇頁）この文章には、青年マルクスの思索と苦闘のあとが読み取れる。

人間の**本質**を「**類的存在**」と見るがヘーゲルらが説く魂（Geist）における**普遍性**は認めず、かわりに「**共同体的な活動**や**共同体的な享受**」「**自由**と必然との、**個と類とのあいだの争いの真の解決**」を論じている。人間は物的なものと見られておりその実生活のなかで

の「類的存在」としての実証が追求されていたようである。「類的存在」とは物的なもののだと人間の精神面での「類的存在」性を認めない。人間性に注目するが、人間は実生活で生き、死によって消える生き物ではないのだととらえる。この辺にマルクスの唯物論的な考え方の特徴があるといえる。しかしそれがまた重大極まりない限界だったというべきであろう。

友愛主義の経済活動への転換を述べたが、これは企業にとっても個人や家計にとっても各種公共セクターにとっても必要なことである。のちに述べるが政府等の公共セクターのその観点からの調整機能——景気調整策、所得再配分政策、カルテル行為その他の不正取引の規制、公害防止その他——が大切になる。なんらかの機関による企業活動の倫理性の吟味・点検等も大切な業務になる。全体としては次の転換が歴史的課題である。

$$Y, (P_1) = F(X, K, L, N) \rightarrow Y_2, (P_2) = F(G, K, L, N)$$

Kは資本、L：労働、N：自然、Yは国民所得、Pは政治、Xは悪徳、Gは善行

## (II) 政治システムの改革

経済と政治はペアである。では政治の改革はいかに行われるか。政治セクターの運営については政治理念や諸点について発想の転換が必要である。端的にいえば動物性にもとづく政治から神性に支えられる政治への転換である。これまででは経済システムのあり方に対応して政治においてもやはり金権・利権政治がおこなわれていたことが多かった。傾向としては富者と強者の政治権力の癒着が起こりその独占と私物化が支配的である。いきおい各種の我欲追求の道具として政治(国家)権力(政府・議会・行政・司法の各省庁と各種選挙)が利用される。いささか強く表現すれば

經濟面と同じで政治もエゴイズムと我欲と悪徳が支配的になる傾向が強い。本来公共性のアトたる政治ではさしあたりは共和制で人々が力を合わせて民益奉仕や正義・友愛・美・善等の公共善の追求を行うべきである。もちろん近代では大衆参加の民主主義・議會主義により正義・公正・福祉を旨とする政治がおこなわれる形になっている。だが政治家・有力者・知識人・各界人士、それに一般人の意識・人格・心理の水準がなかなか向上しない。そのため形式と方向（例えばブルジョアジー向きか労働者向きか）はともかく、實質は卑少な各種の個別利益誘導や利権獲得や我欲と各種物欲追求（まず資本の利益、すると反射的に労働の利益）が大きな比重を占める政治にとどまっている場合が多い。悪しき想念と欲望が諸所方々、社会を黒色にスツポリ蔽っている。神々の光はさえぎられ人々は精神的に悪疫におかされ煩惱の淵をさ迷い、天下の政治は乱れている。

さて改革の方向は何か。マルクスやレーニンの國家論が教えるように、國家・政府の有力な支えが警察力や軍隊にあるということは一応肯定できる（レーニン『國家と革命』、K・マルクス、ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日）。とはいえ、改革は革命によつて暴力的に行うべきではないというべきだろう。E・H・カーが指摘する通り革命は十中八九独裁に帰結する（『ロシア革命五十年』）。また國家と企業からの一種利己的な物取り（國營化・高福祉・賃上げ・ストライキ等）であつてもならぬだろう。ミクロレベルからの精神革命・存在論の革命を進めることを軸にしつつ政治改革を実行すべきである。人間にとつて真に大切なもの・恒久的に価値あるものは何かが判らなくて公益活動としての政治が高級に行われるとは期待しにくいからである。したがつて政経ともに精神的な価値の大きさを重視する方向で改革・改善を実行すべきだろう。

経済は経済活動をつうじる「愛の循環」、人格向上のシステムとして、政治は奉仕・協同・正義・愛・善などの精神的価値、人格・品性向上・地球愛護を追求する公共性のアートとして改革すべきである。

政治も経済も我欲・物欲・快楽の追求という低水準にとどまっていたはならない。物的・身体的な快楽を第一の価値としている限り人類は決して地上に神の国を築くことはできない。およそユートピア思想なるものがあるとするれば、また定立しようとするならこの点の自覚が何にもまして大切である。知識や情報を山積みにし物財を無数に作るうとしても、これを忘れては人間も社会も高き水準には到達できない。知識を教えツメ込むだけで徳性の教化をしなくては高い靈性の人間を育てることはできない。また〇×や偏差値輪切りの学校教育で成長した若者の感覚的・実際的ニーズにだけ答えることに汲々とするようになれば、学問の内容や水準・教育もやがては皮相な知識や情報サービスに墮す危険性が大である。このことは今更指摘するまでもない。肉体性の文明・衆愚社会は衆愚政治を作る——衆愚文化を作る。逆に権力は必ず腐敗・墮落・独裁を生むともいえよう。因みに権力ほど人間の貧欲をそそるものはないといわれる。

そのような訳で政治は共和制を軸に徳義と友愛を原理にする営為に改革すべきである。もちろん各種我欲のエゴイステイックな追求が氾濫・横行する権力・ポスト、利権のあさりの悪徳が支配するシステムであってはならない。「世にあるただ一つの敵は、生の泉を涸らし汚す享樂的な利己主義である」(ロマン・ロラン「愛すること生きること」)。(イ)政治が親方日の丸・官僚政治化、行政が私物化せぬためには、各種官庁の「独立採算制」(ホズラスチョート)を



実施するのも一案だろう。現在のように成果（業績）のいかに拘らず予算（税金）によって官庁が支えられるのは、官庁の効率化（行政改革）や奉仕精神育成を伸長することも難しく、歳出も削減できない。各種の省庁は国民に對し真にプラスのサービスを行い、その実績が国民によって評価されれば料金を受取りその収入が賄われるようになる。省庁をいわば会社形式に近づける。

政治・国家セクターとは、国民に寄託されて市民のためにかつ国民のためにプラスのサービスをするための活動機関である。これまでしばしばそうであるように政治家や官僚の利権追求・私物化で市民・国民や他国・弱小国に害を及ぼす、マイナスのサービス（支配・管理・収奪）をする活動機関であつてはならない。よく詭弁でスリ替えられることが多いけれど、現在でも実体はそうであることが多く、そうであつてはならぬということである。

(註) 国家・政治についての筆者の研究成果には次のようなものがある。「国家論の構図」、『経済評論』一九八〇年六月特大号、「資本主義と社会主義」、『現代資本主義分析』(上)(下)ともに御茶の水書房、「国家とは何かを考える」(『道』、世代群評社一九八〇年六月号)、「ネオ・デタントか冷戦か」(同上一九九二年三月号)、「デタントと冷戦の綱引き」(同上七月号)、『筑波大学経済学論集』所収の一連の歴史観・世界観の研究、「朝日ジャーナル」所収の一連の政策論その他。

政治・国家は市民・国民から税金・法律遵守の投入（インプット）を受け、民益・公益になる公共の活動（産出—アウトプット）を行う。したがつて 産出／投入の係数 がキチンと注視されねばならない。誤つた政策ないし悪政の実行は産出がプラスでなくマイナスになる。政治や行政が不手際だともちろん政治のこの産出係数が非常に低くなる。スターリン独裁や日独伊の全体主義政治等はマイナスの産出が大変ひどく悲惨だつた例である。古代王制や中世

封建政治もマイナスの産出がいちじるしかった事例といえるだろう。プラスの産出もやはりはしたのだが、専制や独裁や収奪・戦争というような倒錯した巨大なマイナス産出に支えられたケースが多かったといえる。

東洋・西洋での古代国家の誕生や各種の専制王朝の成立、中世国家等の歩みを見てみると、起源では公共的な必要があつて生まれたものがかなり多いといえるだろう。だが、結果的には権力欲・名誉欲・物欲等の獣性の欲望の満足のために利用されたり、その仕組みに主体がなつてしまった場合が多かつた。つまり公益性のための機構の面がまったく消失してしまうわけではなく、道路を作り橋を架け土木工事をし建造物を作つたり安全保障の役も果たす。だが、他方で領土や富や人権を取り上げ、王や官僚さらにこれにつながる者達の我欲充足のための集権的政治機構として肥大化することが大部分だつた<sup>(脚)</sup>。

(脚) 国家のもつ二側面のすさまじい例を示すものとして聖徳太子の時代の日本の状態をあげることができる。我欲・我執、猛烈極まりない権力闘争の地獄図の中で聖徳太子は仏法に基づく公共善の政治を確立する努力をしたといえよう。徳永真一郎『聖徳太子』を参照。

上記の事実にかがわれる通り本来は神の子として生み出された人間であるにしても、煩惱によるささやきや「肉の欲や罪」(M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(下)岩波書店による)は大きい。我々一人一人が自らの胸に問うてみた時、大部分が評判良く思われたい心、有名になりたい心、名誉を得たい心、地位を得たい心、権力を握り人の上に立ちたい心、偉いと思われたいと思う心に操られているといえるだろう。操られていない者はおそらく数える程しかないのではないかと明言できる。富を得たい心、かつこ良くしたい心、気に入った異性を自分のものにした心などの現象界での仮りの宿りの肉体に発する欲望・煩惱は数限りなくある。だがこれらの

醜い「肉の欲や罪」は各種のレトリック・詭弁・理屈づけやパフォーマンスや各種のマスメディアを通じるプロパガンダ、教育によって化粧されているので肉眼では醜悪さがそれと見分けられないことが多い。実相では日常の生活と社会での精神・心の腐敗・墮落は恐ろしく、まさに目を蔽わんがばかりである。

現代でも形式は理性・知性を基本とする民主主義・議会政治をとっているが、多くの国で実体は悪徳が支配する金権・利権政治、プレシヤールグループ政治、時には強権政治、つまり物取りないしは分取りあい政治である場合が多く、善や正義等の美徳が見失われている。個人々人についてまた社会についてさらには国際関係において真にあるものは、美徳と悪徳のすさまじいばかりの闘争である。今日も地球上でまたこの日本でさらにはまた各種の組織や集団のなかでこの両者の闘いが繰り返り広げられている。いわば善と悪、神々と魔との闘いが繰り返り広げられている。

現代では善と悪の闘いにおいて、人々が経・政面でも誤って悪を原理としていることが多い。このことを本論文は指摘し、社会・国家・世界人類に対して警鐘を鳴らしたい。

政治は公共善のための協同行為であるもの、公共性のアートの適わしいものとして、これからもっとも「利他即利自」の精神を生かし倫理的かつ文化的に浄化せねばならないだろう。その手掛りとなるアイデアを記そう。政府・政党・国家・地方公共団体を市民や国家との関係でプラスの産出を産むべき公共サービス機関として理解する。そして一種の会社（法人企業：株主は国民）のようなものと見做す発想転換を皆が行うことがキーポイントである。政府とは国民に強権的に臨み舞振る指揮・収奪の機関にとどまることは許されない。ペレストロイカによる集権政治の解体は決して他山の石ではない。世界中の人々がこのことを今ははっきりと理解し胸に刻まねばならない。集権制・官僚制が悪であることを理解するのがペレストロイカの教訓である。権力を稀少資源として作り出し、それを自己利益

のために利用する古いタイプの国家はもはや時代遅れの廃品となりつつある。

発想を転換し、各種のプロパガンダ（当局発表やマスメディア等による）や詭弁やパフォーマンスの粉飾を削り落として、一人一人の国民・市民が冷静な知性の目で見出し、産出係数をねに注視し測定する。そして産出係数を上げべく努力する。首相・政府・議員・役人をパフォーマンスやキャンペーンに欺かれずにキチンと採点する。そして政治の浄化とレベル・アップに努めるべきである。

すでに述べた通りに経済では悪徳が合理的な原理と勘違いされて運営されている。政治についてはさすがに正義や公益性が原理と掲げられているが、経済の悪徳と癒着すること（例えば財界の利益を政官が代行する）もあつて悪徳に傾斜している場合が多い。大企業（経営者層）は政治献金しその希望を政治家に実行させる。政治家（官僚も）その役割を請負い自らも利を得、権力も得る。このような私利追求のコングロマットが多く、国で成立している。いわば政経両面での官僚制支配なのである。言葉を変えれば美徳ではなく悪徳が経・政両面の軸になっている。このために産出されるいわば公害の巨大さはなんといつて表現したらよいか言葉を知らない。大多数の人々は良心の屍として日々動物的に生きている。

経済が「友愛経済システム」に更生の活路を求めるほかないとすれば、政治は友愛と「利他即利自」を基本原理に公共善の担い手として友愛国家として、参加・協同と徳義によつて営まれるように更生を目指すべきであろう。

また国家は総じて分権化し国民にとつて福利と向上をもたらすためにプラスに機能すべく、「小さな政府」が指向されるべきだろう。「大きな政府」は東西の事例に見られる通り、集権化・官僚支配と一般庶民の無気力・沈滞・非効率を生み出しやすい。人間は非常に我執・我欲・魔性にとらえられやすい生き物である。だが反面人格的自由や自己美

現や真・善・美・正義をもとめる内的衝動・心、つまり「内的自己」いわば神性につうじるものをもつ被造物だからである。分権化や民主化さらにいえば徳性の向上を軸にする政治の実現が中央でも地方でもめざし追求されるべきだろう。

(ロ)つぎに財政面ではいわば、「無税国家」とでもいうべき思想と方向性が追求されてよいだろう。国は個人の家計や企業と同じで貯蓄し資産を貯えそこから収入を得るように考えたらどうだろう。在来のように年々の歳出を年々の租税で賄うのはいつまで経つても発展・向上がない。また国民・市民の租税負担は一向に軽くなならない。古代から殆んど発展がみられない現行の財政思想をこの辺で新しい財政思想に転換して行くべきだろう。財政を一方で歳入のファンドを造り出し積み立てる事業とする。ファンドを積み立ててこれを上手に運用して国家収入に役立てるようにする。またファンドをもとにファンド(基金)を積み立てるべく工夫することも大切である。こうして行けば減税(所得税減税、法人税減税)も出来る。いわば「無税国家」の方向を目指すことができる。(『松下政経塾長講話録』P H P刊)筆者は何年前かにこの考えを提唱したことがある。(「理念ある経済政策——危機」克服のための処方箋」日本新聞協会講演)のちに松下幸之助も同様の「無税国家」論を提唱していることを知って感銘を受けた。

租税・増税は民間の活力を弱めることが多くいわば頭痛の種である。上記のような方法でそれを軽減する工夫や努力をすれば民間企業や個人は助かるし国も助かる。国・政府・官庁にもこの大切な基金を上手に運用する建設的な業務が与えられる。財政の改良は企業や資産の国有化(共産主義ないし社会主義)によって解決すべきではない、だが財政はこれまでのようないわば単年度方式ともいうべき旧式のメソッドで遣り繰りして行くべきでもない。この種のミクロの改善がマクロの改善に通じるはずである。こうすれば租税を無理に取り立て威張って配分を決めるという政治の

やり方も是正される。民主化・民本化も進むだろう。

いすでに述べたように政治は分権化し参加を強め権力の集中強化を避け、共和制で民益中心にかつ徳義にもとづいて運営する方向に持つて行く。集権化はどうしても官僚制化をもたらす。企業の国有化・農場の国有化等にもとづく計画経済への転化は、経済権力の集権化・強権化と政治権力の集権化・強権化を生み対照的に一般大衆の萎縮・かわりを恐れる沈黙と無気力を生み出す。

これまでの政治（政治セクター）は同権化や大衆政党の登場ときに社会民主主義政権の成立や福祉国家の面の成長もみただけれど、民間経済における権力・資産集中（大企業や企業集団や財閥による経済支配）と結びついて事実上はブルジョア政党中心の金権政治または強権政治・派閥政治に大きく傾きがちだった。さまざまな意味で各種の利益誘導・利権取引型・私益追求型政治になりやすかった。なによりも我が国の派閥政治、政官財の癒着政治の現状がこれを良く物語っている。このような各種の肉体の欲望充足のための悪徳による政治は誤りである。「物欲・権力欲・名誉等々」の身体から発する欲望（ソクラテス・プラトン・釈尊・キリスト等の教え）にもとづく策謀とバーゲイニングとゼロ・サムゲーム（近隣・隣国窮乏化による利益の追求）の泥沼から神聖なる政治をなんとか救出し、「政治の誤用」を正さねばならぬ。とかく政治は権力闘争で実体は汚いもの悪徳にまみれたものでしかないという印象が広がりやすい。その現実を浄化・向上し愛と正義や公正や理性・協力・協同がゆきわたる共同事業にしなければならぬ。つまり政治的活動は公衆が徳性と倫理と知性を磨く営為であり、民意と衆知を集めかつそれらに秀でた人々がリードして優れた公共活動を行うべきなのである。

民益・公益と徳義を重視する政治こそが大切である。専制政治より民主制・共和制のほうがすべての人々に決定へ

の参加を保証し政治に参加する可能性を保証する。人々はそこで互に触れ合い知恵を出しあい協議・協力する。それを通して各人の魂も磨かれ人格的に向上する。民主制・協議制は適正な結論に辿りつく可能性が大きいシステムといえる。

それは民主制がない場合に殆んどすべてのケースが辿りつく独裁制へののめり込みをチェックしブレーキを掛けることもできる。但し形だけは民主的な手続きを踏み選挙を実施し議会での審議を経ても公正な政治がおこなわれる保証はない。裏で金権・買収政治が行われ、裏取引、買収、威嚇が横行するか、党利党略・派閥の利権あざりが横行し、また計算されたためにするプロパガンダの反復で人々の判断が歪められたり、また人々が首をすくめ口をつぐみ沈黙するようになったのでは、寡頭政治ないしは衆愚政治になってしまふ。公正な政治には情報公開(グラスノスチ)、開かれたマス・コミュニケーションや言論や行動の自由が保証されておらねばならず、言論に対して報復がなされるはならない。各個人に開かれた自由な空間が作られ保証されてこそはじめて人々は政治に主体的に参加し真面目に政治的・社会的な活動を行うことができ、それによって知性と徳性の函養をし魂を向上させることもできるようになる。

「女も男も、いやしくもすぐれた有徳の人物たらんとするならば、どちらも同じものを必要とするわけだ。すなわち、正義と節制とを」とソクラテスは語っている。

「この私は、アテナイ人諸君、諸君に対して親愛の情を寄せ、諸君を愛している。しかし私は、諸君に従うよりは、むしろ神の命に従うだろう。そして私の息のつづく限り、また私にその力があるかぎり、私は知を求める哲学の営みを、けつしてやめることをしないだろう。…」

「世にもすぐれた人よ、君はアテナイ人であり、知と強さにおいて最も偉大な、最も名の聞こえた国の一員であ

りながら、金銭ができるだけ多く自分のものになるようにといったことや、評判や名譽のことばかり気をつかっていることを、恥ずかしいと思わないのか。知恵と真実のことには、魂を。で。き。る。だ。け。す。ぐ。れ。た。も。の。に。す。る。と。い。う。こ。と。に。は、君は気をつかわず、心を向けようとしはないのか？」（藤沢令夫編『プラトン』五一頁、傍点筆者）

ソクラテスのこれらの言葉は私共の生き方を見、日本や世界の政治や経済を考える場合に、今なお類い稀れな迫力をもつて私共に迫ってくる。

「われわれが肉体をもっているかぎり、そしてわれわれの魂が、肉体的な悪と分かちがたく結合しているかぎり、われわれは、われわれの求めてやまぬあの〈真実〉を完全に手に入れることは、けつしてできないだろうから。：戦争も、内乱も、争いも、もとをただせば結局みな、ほかならぬこの肉体とその欲望がひき起こすものではないか。なぜなら、およそすべての戦争は財貨の獲得のために起こるのだが、われわれが財貨を獲得しなければならぬのは肉体のためであり、奴隷のように肉体にかしつかねばならぬためなのだから。：」（同上、八一頁、傍点は筆者）

### 世界連邦への道

次に、留意すべきは動物性の国際政治から神性の国際政治への転換である。政治の改善と向上を進めるためにはどうしても戦争の防止を考えねばならぬ。あらためて指摘するまでもなく戦争は常にさまざま理由づけで正当化される。だが極めて大きな悲劇を生み弱者を犠牲にし弱者にコストを払わせる誤った行動である。にも拘らず戦争は古くから繰り返されている。近年では技術の高度化・兵器の先端化・核兵器・ハイテク兵器の開発によってボタン一つで人類の死滅さえ惹き起こされかねない。ゴルバチョフが指摘するように「人類の存続」のためにいかに無戦の世界に



もつて行くかが現代の最大の課題である（『ペレストロイカ』参照）。

戦争は国家間の紛争が原因で起きる。戦争を準備し正当化するためには常に各種のプロパガンダやレトリックによる正当化や世論操作の作業が行われるので欺かれやすいけれど、はやくもギリシャ時代にソクラテスが洞察した通り、戦争は大多数が富・各種権益・領土・支配権力の追求による争いがもとで起きる。平和のためにといい詭弁で戦争が準備され権力者によつて実行される。

つまり醜く悪しき我欲つまり「肉体とその欲望」のあくなき追求が大半の対外軍事力行使の原因である。国家は安全保障を一因として成立する面もあるけれど、我欲・妄念の集積による想念場の広域悪化に影響されて国内ではしばしば独裁・集権支配（政経の）を生み出す。対外的には紛争や武力による威嚇や侵略・戦争・殺傷・掠奪を惹き起す。国家の風土病は独裁・集権化と戦争である。これらを避けるには一般市民が民主化や平和維持に向けて政府・政党・官庁の監視を怠たらぬことである。マスコミによる世論操作に対し監視を怠たらぬことである。

近代・現代において民族国家への統一がなされた。さらに二度の世界大戦の惨苦をへて国際交流がぐんと進み、国際連盟・国際連合等の各種国際機関が生み出された。これは大きな進歩である。にも拘らず人類は戦争の恐ろしさと惨害に常に脅かされ苦しめられている。戦争をなくすためには端的にいつて世界が「一つの家」（ゴルバチョフ）になることである。また将来必ずそのようになる。これを現実だと信じないのは我々が、国々がエゴむき出しで争う有様を平面的に見ているからである。諸国が友愛に目覚め友愛国家になることと平行して世界は一つの友愛世界になり、「一つの家」「一つの世界」になる。二十一世紀以降の世界では、いずれはかつての部族・氏族が民族国家になったのと同じで一つの国家になる。今の諸国家は世界連邦のなかに統合され、各共和国になる。いわば「世界連邦」になる。国

家は「消滅」(マルクスやレーニン)するのでなく世界国家に向上して行く。世界連邦議会ができ、世界政府ができ世界裁判所も諸省庁も世界通貨・世界銀行もできる。ただし世界連邦の政治はできるだけ分権化するのがよい。

国境がなくなるのだからあまり軍隊は要らなくなり、戦争もなくなる。もともと国家は戦争を減らすための道具としてまた公益性の機関として開発された。それが醜い我欲によって戦争をし支配する道具に顛落した。それが歴史時代の国家の歩みである。ついでに指摘するならば美德と悪徳の対立・抗争が人類の歴史だともいえることを一言しておこう。さて世界連邦ができると所得の世界的再配分も地球の環境保全もつと合理的に実施できる。世界的文化事業・諸イベントも行われる。南北問題や東西問題も解決の決め手が得られる。

すでに述べたように友愛宇宙の神の光の中で太陽系の一惑星である地球上の生態系中で、我々人類が生を享け生命をもっている。このこと自体が人間が「神の恩寵の光に照らされて生きる…」(トインビー『戦争と文明』)ことを示す。この天地人の仕組みこそ人類がひとつの地球人であり互に同胞であり「類的存在」・普遍的存在であることのあますことなき証明である。元来がこのことによって人類・諸民族は真に朋友・同胞であることに目覚め地球単位の政府や国家を作ることを使命づけられている。各国での前述の友愛経済システムと友愛政治システムへの改革・変革の運動は、世界の統合化と政経文化諸側面での友愛・和合のシステム形成の運動に流れ入り、大きな世界運動になる。「世界革命」とかユートピア建設とか語られていたのはじつはさしあたりこのようなものであるだろう。これこそが共産主義化とファシズムを生まない愛と連帯の改革運動である。これまで百数十万年の人類の歴史はそこに到る歩みである。その実現が現実的な課題になってきた今、人々はより本源的な姿に立ち戻ること、精神性を中軸にする生き方に立ち戻りより賢くなること、徳性を正すことを要請されている。国々も同じく我執を捨てより賢くなるように努めね

ばならぬ。

世界政府・連邦の理想はこれまでもいろいろ賢人達によって語られてきた。カント、アインシュタイン、賀川豊彦（『賀川豊彦全集』）その他。国々が分立し互いの貧欲を近隣窮乏化的にかきあい、国々の有力者が大衆を騙し脅し周期的に戦争（殺戮と破壊と民衆の自由剝奪）をし、それを道具に使って富や権力や名誉を獲得する。この事實は幼稚で大きな誤りであるし、犯罪的といって良い行為・行動だろう。少数の強者のこの悪行によってこれまで無数の戦争が起こされた。私欲達成のために真相を知らされず理解しない無数の庶民・弱者を強権的に巻き込み筆舌に表わせぬ苦痛を味あわせるのは悪徳の行為である。真に理解に努めねばならぬのは悪徳が獲得をめざす富や利権や権力や名誉は、真の富や価値ではありえないことだ。しかもそれらを悪徳によって追い求める所業は永遠に消せぬ罪業であることだ。それはその推進者達にとってじつは価値と富との取り返しつかぬ喪失であることだ。

戦争の威嚇による外交（いわば腕力外交）という悪行を廃絶する決め手は、上述のように世界諸国の非軍事的交流と協力と統合化の推進（一例としてはEC）である。大国（経済力・軍事を備える）が自国のエゴ・私益と絡めて「世界の警察」の役割を演じたり、大国（例えばG5、G7）が同盟して中小諸国の紛争に武力介入（戦争実行）したりすることではないだろう（例えばベトナム戦争や湾岸戦争、後者の実相については、ボブ・ウッドワード『司令官』がくわしい）。

新旧植民地主義が不公正なのはいうまでもない。ついでながらブッシュ大統領が提唱する世界新秩序について一言しよう。国連が世界の平和のために努力するのはよいとして、現状では米国等の少数の大国の私利（安保理事会）が国連の意志決定を實質上左右している。また大国の主導による地域紛争への武力介入がかえって惨害を拡大し紛争を

拡大し泥沼化す可能性もある。武力によって平和を維持するという政治思想はかえって地球上を硝煙が立ち込める世界にするだろう。大国の有力者にとって戦争は大変うま味がある（政経両面での利益や人気取り）。しかしそれが大國間の世界戦争の糸口にならぬという保証はない。また犠牲にされるのは常に内外の庶民・弱者だといってよからう。大國（例えば米國）が紛争の解決を口実に政経両面で世界のヘゲモニー（新帝國主義）を握ろうとするのは誤りで、現代資本主義の悪しき帰結だといえるだろう。

最後に一言すると近代世界での改革運動がまだ勝利者になりえていないのは、本稿が論じたような政経の改革理念が確立されなかつたことによる。経済システムと政治システムの改革が個別主体の善意志（友愛者）によるミクロレベルよりの精神革命を軸に、資本主義の友愛主義・「友愛主義社会」ないし友愛社会主義への転形として実行されるべきである。市場経済システムと議会政治（共和政治）をベースにする、自由を原理にするミクロレベルからの互助・協同の社会改革という理念が確立されるべきである。資本主義（市場経済）や國家を愛と「連帯」と徳義を原理として改革する。この方法こそがじつは、「神の國」を地上世界に実現する最も確かな道である。このことをこれまで説得力あるかたちで明確に理論化して定置できなかったことが改革を拒んできたといつてよからう。

自由のアンチテーゼが「共同」だったが、両者の止揚は自由を原理にする互助と協同である。個を無にする協同は失敗する。個の尊重の上に立つ互助・協同こそが個と社会の根本問題を解決するポイントである。

改革理論としてもつとも徹底した形式と内容をもつのがマルクス・エンゲルスやレーニンの理論だった。それを明

確に超克する理論を構築できなかったことが現代世界の改革運動を成功させなかった。社会改革は階級間の憎しみと闘争によつては成功しない。憎しみと闘争はあらたな憎しみと闘争の連鎖を生むだけである。愛と徳義と連帯こそが次元を超える永遠の実在であり富・価値であることを悟つて、それを軸に全社会の浄化と改革に努力すべきである。それらの目に見えない美德こそが人々を結びつける真の貨幣である。これこそが恒久の富であることを実在論にそくして認識し理解することが大切であろう。私共は肉眼で見える貨幣だけでなく、見えないが、じつは強力でかつ広範囲に社会と世界中を動き回る愛の貨幣の循環に今こそ真剣に注目せねばならぬ。こういう原理によつて改革された社会ではマイクロレベルでもマクロレベルでも「繁栄の法則」が支配する。ロバート・オーエンのニューラナーク工場での実業的成功こそがその不滅の金字塔である。

フリーエ、ラッサール、J・S・ミル、ラスキン、マーシャル、ピグー、ケインズ、ウェツプ夫妻（フェビアン協会）ドイツ社会政策学会、内村鑑三、賀川豊彦、大日本友愛会、ベルンシュタイン、トロツキーらの貴重な流れ、さらにはケインズ主義や福祉国家等の資本主義改良の流れの良き部分が、ペレストロイカ、グラスノスチ（情報公開）東側社会主義の解体という歴史的事件の世界的衝激が広がる今こそ、かつてそれらに乱暴に投げかけられた激しい中傷や罵倒やレッテル張りをはらいのけて正当に評価されねばならぬであろう。（隅谷三喜男『日本の社会思想』城塚登『社会思想史入門』）。ここに一例としてラスキンをあげておこう。ラスキンは利己心にもとづく古典派経済学を批判して「富の眞の価値はそれに付せられた道徳的標識に依存する…」。生なくしては富は存在しない。…利己心にもとづく政治経済は、すべてその昔、天使政策に分裂をもたらし、天国の経済に廃虚をもたらしたものの再現にほかならない」としている。まことに正鵠をえた指摘といわねばならぬ（この最後の者にも—ポリティカル・エコノミーの基

本原理に関する四論文」ラスキン・モリス『世界の名著』52)。

ところで良識的な改革の路線がマルクス・レーニン主義の側からその潮流に投げつけられた嘲笑と中傷と罵倒を撥ね返す十分な力がなかったのは何故か。またそれらが改革の本道をつねに歩んだといえぬ面があるのは何故か。それがマルクス・レーニン主義等を綿密に吟味・超克し友愛主義社会の論理(グリユンドリセ)を、経済学・哲学・人間論・国家論・政治学・歴史学などの諸科学を基盤にしつつ確固たる形状と内容のものに定式化しえなかったことによるといえるのではないか。端的にいえばいずれからもマルクスやレーニンを超える確固たる理論が創出されなかったことによる。

マルクス主義はもともと強烈な人間主義 (humanism) からスタートした(マルクス『経済学・哲学草稿』)。ところがありていにいえばマルクスやエンゲルスの中にはレーニン・スターリン等には、他者に対する徹底した破壊性・ひがみと軽蔑心と嫉妬心と時に強い憎悪心があった。そこからゆき過ぎた徹底化や偏った理論化や対立者への徹底的な批判中傷や全面否定が生じた。『ゴータ綱領批判』でのラッサール主義批判、『哲学の貧困』でのプルドン批判や『空想より科学へ』(エンゲルス)の他の改革思想をすべてガラタカ『空想』と決めつける抹殺主義に、それがよく表われている。マルクス主義の内容やレトリックにはじつはマルクスの独特な性格やいこじな想念や境遇が大きく投影していたのである。そのために長所も多いが教条主義的に受取ると大変悪い結果を招くことになることがある。ロシア革命の失敗にはストレートにそれが出たといえる。

マルクス・レーニン主義の社会主義・共産主義にうたわれたラジカルな共同体社会建設(個の薄い全体組織)、国有化・暴力革命は総て独裁や非効率・不和に帰結し「失敗」する結果に終えている。憎しみや軽蔑(フリーエ)・嫉妬や

直接行動は一見すると改革や革命を達成しやすい決め手に見えるが、手段を選ばぬ権力争奪戦になる結果、結局「失敗」する。憎しみと攻撃の循環は破壊的である。これに対し愛と互助の循環は建設的である。因みに『資本論』に記されたマルクスの経済学と社会改革論・革命論としての社会主義（共産主義）イデオロギーは一応別のものと考えられる。筆者は近く別稿でマルクス経済学の良き面を生かし足らぬ点、誤った点を是正する理論を記す予定である（ある意味では新しい経済理論の建設といえる）。ともあれ、マルクスに学びその良き点は生かすつつ広い視野の下で、それを超克する作業が求められている時代であることは今や明らかである。

さしあたり後者（政策観としての）マルクス主義についてみると、マルクス主義（マルクス・レーニン主義）はもともと人間主義からスタートした。だがその人間本性論の欠落と誤謬（人間本質としてのスピリット spirit の否定）や存在論での絶対者・創造主・神霊の手荒な否定や、社会主義論における生産手段の国有化（貨幣廃止論も含む）や「階級闘争史観」への傾斜が社会改革運動の中にも厳しい内部抗争と分裂を生んだ。（そのバイブルともみなされた『共産党宣言』の「階級闘争史観」参照）。ラディカルな一揆主義と中道的な改良主義の間に反揆・分裂・対立の要素が常に持ち込まれ、人道主義的な社会改革運動の健全な成長と発展が阻げられた。

マルクスやエンゲルスらの社会改革思想は優れた面を持ちながら…（単なる資本主義擁護論には欠陥と弊害がある）…「科学」であることを目指しつつ結果として「空想」に陥った（F・エンゲルスの『空想より科学へ』の世界思潮に与えた影響は大だった。だが間違いが多かった）。さらに政治（国家）は階級支配の暴力的道具だと主張したマルクスやレーニンの国家観や前衛党による革命（暴力）や党組織での民主集中制（スターリンやレーニンの）にはゆき過ぎや誤りがあった。民主集中制について一言しよう。この考えは結果として組織内のメンバーに批判をぬるさぬため

不可避的に官僚的独裁制に辿りつく、誤った組織原理である。…ペレストロイカ、グラスノスチでそれは証明された。これでは改革者は自らの属する組織について批判をゆるされず、批判すると報復を受ける。内部の腐敗と不正を正しようがない。そこで組織の内部は中傷やレッテル張りや裏工作や取引だけのいわば権力争いの闇の世界になってしまふ。すべてが力と数の闘争と多数決、形式だけの会議の世界になってしまふ。スターリニズムがその典型（内部批判を拒む日本の各種組織の集団主義にもこれにつうじる<sup>(四)</sup>）である。相互批判がある議会政治や理性と愛と知がある共和政治が消えてしまうのである。例として「組織至上主義からの脱却」（『日本経済新聞』一九九一年十一月二四日）がこれを指摘している。

(四)「空想的」。私日見のとレッテル張りと言で片付けられ抹消された社会思想の中にも、優れたアイデアや理論が沢山あった。すべてが必ずしも空想ではなかつたといえる。かといつてもいわゆる社会民主主義思想<sup>(四)</sup>は、内容が漠然とした寄木細工で修正資本主義をしのぐ思想たりえていない。次に記すようなすべての流れを包括できる地球・人類新時代をリードできる懐が深い思想は、これまでまだ現れていない。

- (四) 平和民主主義＝資本主義十洋風主義(新民主主義)  
 組合運動、普通選挙制、福祉政策、平和主義等の寄せ集めの、修正資本主義を超越する力強い論理でない。
- (a) 中道的社会改革思想
  - (b) キリスト教系その他の宗教系統の社会改革思想
  - (c) マルクス・レーニン主義的な社会改革思想
  - (d) 労働組合運動を支柱にする社会民主主義
  - (e) 市民層での社会改良志向



- (f) 実業界の良識的思想  
(g) 環境保護・公害問題・反戦運動・女性運動・消費者運動・各種の市民運動・教育運動・南北問題・社会福祉問題

これらの良き志に基づく社会改良・改革運動のそれぞれの良き面を活かし真に統一し止揚できる改革思想が定立されなかつた。そのためマルクス主義と非マルクスの改革運動の間に近親憎悪的な分裂が起こり(日本を含め世界的に)、改革運動の統一ができなかつた。この点に近代・現代世界の不幸があつたし、また我が国の戦前・戦後・現在の不幸ある。もとめられる新思想は何か。すでに述べたようにそれには友愛宇宙・地球・市民の観点から生まれる新ヴィジョンであらう。

友愛主義社会—友愛社会主義の理念と思想

本稿はその「綱要」(グリユンドリセ)にあたる。総ての良心的なる人々の真実在(精神)の注視・透視にもとづく我執・欲望を捨てた愛と連帯の必要(人間性の真実にフィットしたミクロ・マクロの繁栄が可能)。自由・自主・自立にもとづく協同と連帯のみが(集団主義でなく)、我欲・我執・仮象たる物質への執着(悪徳)の社会システムを光と善と道義(モラル)の永遠的価値を中軸にする社会システムに転換できる。各種の仮象への偏執・妄執で人類と地球を破壊しつづける資本主義(Capitalism)を克服でき、神性の自覚に基づく愛と正義・善行の政経(社文)・科学システムの建設ができる。すなわち闇の欲望の社会システムの光と善行の社会システムへの転換こそが新理想なのである。